國學院大學学術情報リポジトリ

プロジェクト活動紹介1
デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-08
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 平藤, 喜久子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001903

「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」

プロジェクト責任者　平藤　喜久子

1．プロジェクトの概要

本プロジェクトは、2013年度から2015年度まで実施された「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」の後継的な位置づけのプロジェクトとして2016年度にスタートした。

これまでのプロジェクトでは、研究開発推進機構全体で構築してきた「國學院大學デジタル・ミュージアム」（http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/）の運営、またデジタル・ミュージアムを通して発信するプロジェクト独自のコンテンツの拡充を手がけてきた。本プロジェクトでは、これらに宗教文化教育の教材研究についての国際的な展開を加え、事業を遂行していくこととした。教材研究に当たっては、「宗教文化士」資格の認定制度の運営を担う「宗教文化教育推進センター」（CERC、サーク）との緊密な連携を取りながら進められた。

なお、2016年度には、文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」に國學院大學博物館の「東京・渋谷から日本の文化・こころを国際発信するミュージアム連携事業」が採択された。この事業には本プロジェクトの事業内容と目的が重なり合う部分もあったため、プロジェクトの構成員が中心的な役割を果たす活動も含まれた。

加えて、2016年度後半には研究開発推進センターを中心に行ってきた「「古事記学」の構築」事業が、文部科学省2016年度「私立大学研究ブランディング事業」タイプB（世界展開型）に採択された。本プロジェクトの構成員、また研究事業には古事記学と関わる部分も多いので、連携して研究を進めた。

2016年度の本プロジェクトメンバーは次の通りであった。

責任者　平藤喜久子

分担者

専任教員：星野靖二、塚田穂高、鈴木聡子

兼担教員：井上順孝、黒﨑浩行、藤澤紫、ノルマン・ヘイヴンズ

客員研究員：市川収、加藤久子、キロス・イグナシオ、チャールズ・フレーレ

PD研究員：アンドレア・カスティリョーニ（～８月）、村上晶

客員教授：土屋博、ケイト・ナカイ、山中弘

共同研究員：天田顕徳、李和珍、ヤニス・ガイタニディス、イヴ・カドー、野口生也、ジャン＝ミシェル・ビュテル、牧野元紀

2．2016年度の成果

（1）デジタル・ミュージアムの運営

システムの円滑な運用のため、ワーキンググループ会議を３回開催して、各データベースの実務担当者・システム設計業者と情報の共有を図った。前年に引き続き、システムの新サーバ移行に伴う設定変更作業を行った。データベース一覧を作成し、使用の便宜を図ったほか、収録データの件数を増やした。また、二十二社写真データベースの公開について議論を行った。

昨年度末までに公開されたデータベースは以下のとおりである。

大場磐雄博士資料
大場磐雄博士写真資料
大場磐雄博士著作目録
折口信夫博士歌舞伎絵葉書資料
教派神道関連資料データベース
皇學館大学神道研究所所蔵原田敏明毎文社文庫写真資料
国学関連人物データベース
祭祀遺物出土遺跡データベース
柴田常恵瓦拓本資料
柴田常恵写真資料
柴田常恵野帳資料
社寺等絵葉書資料
神道・神社史料データベース（現代）
神道・神社史料データベース（古代）
杉山林継博士収蔵資料
図書館デジタルライブラリー
國學院大學博物館収蔵縄文土器
國學院大學博物館発掘調査報告書
樋口清之博士著作目録
ホルトム文庫目録
万葉集神事語辞典
Articles in Translation（双方向論文翻訳）
Basic Terms of Shinto 神道基本用語集
Encyclopedia of Shinto
신도사전（Encyclopedia of Shinto in Korea）

（2）デジタル・ミュージアムの展開のための独自のコンテンツの構築

◇神道古典の英語訳

神道古典の英語訳について「「古事記学」の構築」事業と協力して古事記の英語訳を進めた。2016年度は、古事記の冒頭部分の英訳、および注釈についての英訳を行った。今回の翻訳のポイントは、本学における古事記学の成果、および現代日本における古事記研究の最先端を海外に向けて発信するという点である。そこで「「古事記学」の構築」事業で刊行してきた『古事記学』（研究開発推進センター）に掲載された古事記の現代語訳、注釈をもとに翻訳を行った。

現在、古事記については19世紀のチェンバレン、20世紀のフィリッパイ、そして近年にはヘルツの英訳が刊行されている。チェンバレン、フィリッパイについては、読みやすい翻訳ではあるが、神名の表記の仕方に難がある。ヘルツについては、神をすべてspiritと表現している点が問題であろう。また注釈がないことも、海外の初学者には不親切に感じられる。そこでEncyclopedia of Shinto（EOS）を長く編集してきた研究所の蓄積を踏まえた新たな訳を提示する必要性があると考え、着手することにした。

翻訳に当たっては、日本神話を専門とするキロス・イグナシオ客員研究員を中心に、チャールズ・フレーレ、平藤喜久子が協力をし、ケイト・ナカイ客員教授に校閲を依頼した。

参考までに古事記の冒頭部については次のような訳を提示している。

Chapter 1: Heaven and Earth First Become Active

When Heaven and Earth first became active, in Takamanohara 高天原 there came into existence a deity named Amenominakanushi no kami 天之御中主神. Next appeared Takamimusuhi no kami 高御産巣日神, and next, Kamumusuhi no kami 神産巣日神. All three came into existence as solitary deities, and they hid their bodies.

Then, at the time when the land was in an embryonic state, like floating fat, and drifting about like a jellyfish, something like a reed shoot began to sprout, and from it came into existence a deity named Umashiashikabihikoji no kami 宇摩志阿斯斯比古遅神. Next appeared Amenotokotachi

no kami 天之常立神. These two deities also came into existence as solitary deities and hid their bodies.
The five deities mentioned above constitute the Special Celestial Deities.

加えて、EOSの校閲を行い、また日本語表記の項目名の追加作業を進めた。教派神道・神道系新宗教の資料について、内容を精査して整理を進めた。ミュージアム連携事業と協力して神社写真データベースの設計・構築を進めた。また同データベースの内容を更に充実させるために調査を行った。

（3）宗教文化教育の教材研究の国際的展開

◇現代宗教に関する資料・データの収集とそのデジタル化

日本文化研究所と「宗教と社会」学会の「学生宗教意識調査プロジェクト」は、共同で1995年から2015年まで、全12回の学生の宗教意識調査を行ってきた。毎回4000名超の学生からの回答を得た、きわめて貴重な調査である。その過去12回に及ぶ学生宗教意識調査をまとめた報告書を作成し刊行した。下記のサイトからダウンロードできるようにし、公開性を高めた。
https://www.kokugakuin.ac.jp/research/oard/ijcc/ken-nicgibunkenkankobutsu/p01

今後は、こうしたデータを研究に生かしていくことが求められている。

◇日本文化、宗教に関する教材の作成、オンライン公開

「宗教文化教育推進センター」と連携してオンライン教材の作成、発信を進めた。宗教文化教育に関する研究会を４回開催し、宗教文化教育の実例について報告を受けて議論し、また教材を作成して内容を検討した。

（4）日本文化研究所国際研究フォーラムについて

毎年日本文化研究所において開催している国際研究フォーラムを、2016年度はSISR東アジア国際ワークショップと連携して実施することとした。「東アジアのグローバル化と宗教文化」を共通テーマとして、2016年10月15日にSISR東アジア国際ワークショップを、10月16日に日本文化研究所国際研究フォーラムを開催した。

３．2017年度の実施計画

（1）デジタル・ミュージアムの運営

2017年度も引き続きワーキンググループを重ね、デジタル・ミュージアムの改善に取り組み、また新しいデータベースの公開も準備していく。

（2）デジタル・ミュージアムの展開のための独自のコンテンツの構築

◇英語のポータルサイト

現在デジタル・ミュージアムでは、日本文化研究所の独自のコンテンツとして、いくつかの英語のデータベースを構築し、公開している。これらのコンテンツは、現在のデジタル・ミュージアム上では、日本語に習熟していない外国人にとっては、見つけづらく、使いづらい状況におかれている。そこで神道に関する情報へのまさに入り口となるべきサイトを作成する。これは英語だけでなく日本語も視野に入れ、国内外の学生が神道を学ぶときに活用できるポータルサイトを目指す。2017年度はレイアウトの検討を行いつつ、各データベースの内容を充実させることに注力していく。

◇神道古典の英語訳

前述のように本事業では2016年度から古事記の英訳に着手しているが、「「古事記学」の

構築」が「私立大学研究ブランディング事業」に採択され、全学的な事業となったため、基本的には「ブランディング事業」として行い、本プロジェクトでは、全面的にサポートするという体制となる。

◇収集している教派神道・神道系新宗教の資料の整理とデジタル化

現在は、福岡県北九州市小倉南区に本部を置く神理教の教祖・佐野経彦関連の資料として『本教神理図』を公開している。2017年度はこれに加えてこれまで収集してきた神理教や神道修成派を中心とする教派神道、神道系新宗教に関する文書資料について、公開を進めていく。これにより教派神道、神道系新宗教の研究に資することができると考えている。

（3）宗教文化教育の教材研究の国際的研究

◇現代宗教に関する資料・データの収集とデジタル化

2016年度には学生宗教意識調査の総合報告書を刊行したが、2017年度はその過去20年分の調査結果に関する考察篇を刊行する。また、現代宗教についての調査、研究成果の国際発信、教材としての提供のため、井上順孝著『新宗教の解読』について英訳を刊行する。

◇日本文化、宗教に関する教材の作成、オンライン公開

学術メディアセンターに設置されている「宗教文化教育推進センター」と協力し、日本文化、宗教文化教育のための教材作成を進めていく。現在は「世界遺産と宗教文化」、「映画と宗教文化」、「博物館と宗教文化」といったデータベースを公開しており、その拡充とあらたなデータベースの研究を進めていく。

◇教材動画のシステム構築

EOSでは、これまで多数の動画を作成し、公開してきた。ほかにもこれまでの研究所のプロジェクトを通し、貴重な宗教文化に関する動画が撮影され、デジタル化が進められてきている。これらの動画資産を日本文化、宗教文化を学ぶための教材として国内外で広く使えるようにするため、公開の仕組みについて検討を始めることとした。2017年度は、動画の整理、データベース化を進めるとともに、どういった形式で公開するかなどについて検討を行う予定である。

◇国際的な教材研究の展開

本事業における宗教文化教育の取り組みについて、国際学会の場などで紹介し、今後の研究者のネットワーク形成をはかる。具体的には2017年７月にスイス、ローザンヌ大学で開催される国際宗教社会学会において、井上順孝が研究発表を行う。

◇日本文化研究所国際研究フォーラムについて

2017年度の国際研究フォーラムは古事記学センターとの共同開催とし、11月26日に「日本の宗教はどう教えられているか」と題して実施することとした。主に日本国外の学生を対象として、何らか日本の宗教についての講義を実際に担当している方に発題を依頼し、受講学生の興味関心、教育の方法や情報通信技術の活用状況、あるいは現状において問題となっている点などについて述べてもらった上で、ワークショップ的に実践的な意見交換を行う予定である。登壇者は以下の通りである。

マイカ・アワーバック（ミシガン大学日本研究センター）、ダーヴィッド・ヴァイス（テュービンゲン大学日本学科）、クリントン・ゴダール（北海道大学現代日本学プログラム）、シンシア・ボーゲル（九州大学人文科学研究院）、平藤喜久子（國學院大學研究開発推進機構）、櫻井義秀（北海道大学大学院文学研究科）。